

ガンジュレ人の言語使用*

乾 秀行 (山口大学)

キーワード： ガンジュレ語、少数言語、言語使用

0 はじめに

本稿の目的は、エチオピア連邦共和国内の北オモ系少数言語である、ガンジュレ (Ganjule) 語¹ 母語話者の言語使用の実態を明らかにすることにある。

ガンジュレ語は、Fleming (1976) に従えば、北オモ系言語の中でもさらに、ザイセ (Zayse) 語²、カチャマ (Kachama) 語³、コイラ (Koyra) 語⁴ などと同じく、東オメト語の一つに分類されている。もともと、エチオピアの中で、セム系、クシ系の言語に比べて、オモ系の言語の記述研究は、あまり進んでいないのが現状である。ガンジュレ語についても、近年 Brenzinger (1999) や

*本稿のデータは、2002年11月6日に、エチオピア連邦民主共和国内のガンモゴファ州のチャモ湖西岸に位置する、シェラメラ (Shela-Mela) 村のマーケットで、ガンジュレ語母語話者の言語使用に関して、聞き取り調査したものである。調査の際には、2003年に病氣のため夭逝した Tamiru Shankoru 氏が同行し、筆者の手助けをしていただいた。感謝の意を表すと共に、ここに謹んでご冥福をお祈りする。なお本稿は平成13～16年度科学研究費基盤研究 (B)(1)「多言語国家エチオピアにおける少数言語の記述、ならびに言語接触に関する調査研究」代表柘植洋一 (金沢大学)(課題番号 13571039) による研究の成果の一部である。

¹言語名に関しては、Ganjawle とも言われる。また、ガンタ (Ganta) 語もガンジュレ語の方言であると言われている。なおその歴史的経緯については、本稿の中で言及する。

²Grimes (2000) では、Zayse-Zergulla となっており、ゼルグラ (Zergulla) 語という名称は、ザイセ語の方言として位置づけられている。

³Kachama は、ウオライタ語からの呼び名として、広く知れ渡っている。それ以外に Gats'ame、Get'eme がある。前者は民族名で、後者はグジ・オロモからの呼び名である。

⁴言語名としては、Koyra 以外に Koorete がある。

Siebert & Hoefl (2002)⁵が Survey of Little-known Languages of Ethiopia⁶に基づいて、語彙の収集を行っている程度で、管見の及ぶ限り、包括的な記述研究は今のところない。したがってまた、系統的な裏付けも十分明らかになっているとはいえない。

1 先行研究

1.1 居住地域の移動

ガンジュレ人は、元々チャモ湖の北西に浮かぶ、小さなガンジュレ島に住んでいた。Siebert & Hoefl (2002:14)によれば、複数のガンジュレ人の話から得た情報として、水面が徐々に上昇して農業地域が水没したために、政府により強制的に移住させられたとのことである。1959年(エチオピア暦1951年)にまずボンケ(bonqe)村⁷に移動し、さらに1974年(エチオピア暦1966年)に現在のチャモ湖西岸のシェラメラ村に移動した。なお、元のガンジュレ島には、現在誰も居住していない。

1.2 話者数

Bender (1976:8)には、ガンジュレ語の話者数がわずか50人と記載されている⁸。一方Grimes (2000)によると、1998年の人口調査で、ガンジュレ語母語話者は1,390人とあり、そのうち、単一言語話者が186人となって

⁵彼らは1994年10月27日から11月3日の間に、アバヤ湖およびチャモ湖周辺の言語調査を実施している。

⁶SIL (Summer Institute of Linguistics) が1993年から1994年にかけてアジスアベバ大学のエチオピア学研究所 (Institute of Ethiopian Studies) と協力して、エチオピア国内の少数民族言語の記述を行っている調査のことである。

⁷アバヤ湖とチャモ湖の西側の山の中腹にあり、アルバミンチから車で約30分、現地人の足でも3時間以上離れたところにある。ただし、現地の人にとって決して陸の孤島ではなく、毎週マーケットの日ごとに、アルバミンチまで大きな荷物を背負ってやってくる。

⁸Sommer (1994:344)でもこの数字が踏襲され、アフリカの危機に瀕した言語の一つとして挙げられている。ちなみに同論文には、アフリカの危機言語および死滅した言語として、150あまりの言語および言語グループが挙げられている。

いる⁹。同様に、Brenzinger (1999) および Siebert & Hoefl (2002) においても、1994年10月時点で、150家族1,500人程度のガンジュレ人が、シェラメラ村に住んでいると記載されている。Bender (1976) がいつの時点の人口調査に基づいているのか確認できないが、単純に人口面から見れば、ガンジュレ語は消滅の危機から脱したと考えることもできる¹⁰。ただし、現在どのような言語使用の実態なのか、詳細は不明なままである。そこで、この点を明らかにすることを目的に、シェラメラ村で社会言語学的なアンケート調査を実施した。

1.3 近隣言語との親近性

ガンジュレ語は、Grimes (2000) の中で「KACHAMA-GANJULE」というくくりで、カチャマ語と同一言語として位置づけられている¹¹。ところで Brenzinger (1999:34f.) には、アバヤ湖とチャモ湖に浮かぶ島の言語に関して、カチャマの言語名の由来や民族の移動の歴史についての簡単な説明がある。それによると、ガツアメ (Gats'ame) 人¹²は、1977年にアバヤ湖南端のゲテム (Get'eme) 島を離れ、アバヤ湖西岸のウガヨ (Ugayo) と呼ばれる所に移動した。さらに1988年に、アルバミンチからソドに向かう道路沿いのモレ (Mole) 村の南側に位置する、元いた地名とたまたま同じ名前前のウガヨ (Ugayo) 村に移り住んだ。ちなみに今は、ゲテム島に誰も住んでいない。つまり、ガンジュレ人と同じような民族移動を余儀なくされた島民族といえる。理由は、やはり湖の水位上昇のためである。

さて、カチャマ語との親近性であるが、Brenzinger (1999:34) には、ガツアメ人がガンジュレ人と頻繁に結婚するという記述がある。また、Siebert & Hoefl (2002:15) にもインフォーマントの話として、「カチャマ語とガンジュレ語はとても似ている」と記載されている。しかしそれ以上の記載は

⁹言語や民族集団別の人口調査は、アフリカのような多言語国家では、その時々において、高度に政治的な意味合いを持つ。90年代以降、エチオピアの政治体制が連邦制に移行し、各民族の権利が認められたことが背景にある。

¹⁰かりにそのまま住み続けたとしたら、小さなガンジュレ島の中だけでは、現在のように千人を超える人が生活できる土地がなかったであろう。

¹¹Grimes (2000) には、母語話者数に関して、カチャマ 2,682 人、ガンジュレ 1,390 人、合計 4,072 人と記載されている。

¹²カチャマ語の民族名 (脚注3参照)。

特になく、それを裏付ける社会言語学的資料が挙げられているわけではない。また共時的観点から二言語併用について考えてみると、ガツアメ人がアバヤ湖の北に分布する、地域有力語のウォライタ (Wolayta) 語を話すウォライタ人居住地域と隣接しているのに対して、現在のガンジュレ人居住地域であるシェラメラ村の周りには、少なくともウォライタ人居住地域はなく、ウォライタ語よりも、むしろシェラメラ村周辺の地域有力語であるガンモ (Gamo) 語や、同系とされるコイラ語やザイセ語¹³との言語接触の方をまず第一に考えなければならない。カチャマ語とガンジュレ語が歴史的にどのような親近性を持っていたか、さらに詳細な調査をして確かめなければならないが、共時的に見れば異なる言語として歩み出している可能性がある。

一方、ガンタ語¹⁴との親近性であるが、1.1でも触れたように、ガンジュレ人がガンジュレ島から今のシェラメラ村に移動する間に、途中15年間ボンケ村に住んでいたという歴史的証拠がある。また、ガンタ人の居住地域が、ボンケ村とその隣のメーチェ村の2つの村に限られ、周りはすべてガンモ人の居住地域に囲まれているという特殊な地理的条件からも、ガンジュレ語とガンタ語の親近性が窺える¹⁵。Siebert & Hoefft (2002:14) にも、ガンタ語との親近性に関する記載がある。それによると、「ガンタ人の子供は彼らの母語であるガンタ語に加えて、ガンジュレ語も話す」とある。また別の説明として、「ガンタ語とガンジュレ語は一つの言語であるか、少なくとも両者はとても似ている」と記載されている。筆者も2002年3月に、オモ系少数言語の記述をするための予備調査として、一度ボンケ村とメーチェ村を訪れたことがある。その際、ごく少数の基礎語彙を収集したが、それを見る限り、語彙の面からは、ガンジュレ語と同一言語の方言関係にあると速断できない¹⁶。さらに多角的な観点から詳細な研究が必要

¹³Siebert & Hoefft (2002:14) には、「ガンジュレ人とザイセ人は互いに困難なく会話ができる」とある。なお、コイラ語およびザイセ語の比較的材料とまとめた記述研究は、それぞれ Hayward (1982)、Hayward (1990) にある。

¹⁴脚注1参照。

¹⁵アルバミンチでも、ガンジュレ語とガンタ語は同じ言語の方言関係にあるという話をよく耳にした。なお、Brenzinger (1999) に記載されている地図 (図1) 上のボンケ村の位置は間違っている。地図上の「Ganta」と書かれたあたりにボンケ村はある。

¹⁶基礎語彙からの比較研究は、本論の目的の範囲を超えるので、別の機会に譲らなければならない。ただし、アルバミンチ周辺の複数の少数言語の基礎語彙を見比べた印象としては、

であろう。

1.4 アフリカの少数言語の実態

有名な Krauss (1992) の悲惨な予測によれば、現存する世界の約 6 千あまりの言語のうち、10 万人以上の話者数を持ち、将来も安泰な言語はせいぜい 600 言語程度で、100 年後には約 90 % の言語が死滅の危機にあるという。Nettel & ロメイン (2001) も、アフリカの言語の実態について、全アフリカ諸国がかなり重症で、消滅の危機にある言語も多いとの認識を持っているようである¹⁷。

一方 Brenzinger (2001) では、エチオピアの少数言語などの実態を例に挙げながら、Krauss の予測がアフリカではそのまま当てはまらないとの見解が示された。それによると、アフリカ諸国では、少数言語を取り巻く環境が、他の大陸に見られるような国家の公用語対少数言語という単純な図式ではなく、その間にいくつもの地域有力語が介在し、国家よりも下位のレベルで多層的に絡み合っている。言語交替や言語の消滅が起こるとしたら、まずもって近隣の地域有力語との間に起こる。このような言語の多層性は、アフリカ大陸の一つの特徴であると述べている¹⁸。

Nettle (1999) に少数言語の話者数に関するデータがある。話者数という尺度からだけで見れば、南米、北米、オーストラリアなどに比べて、アフリカ大陸の少数言語は、相対的にそれほど危機的ではないようである¹⁹。その要因の一つとして、アフリカ大陸における人口の爆発的な増加が挙げられる。エチオピアでも、90 年代はじめに長い内戦が終結したことにより、また、おそらく食料支援や医療体制の改善により、人口が爆発的に増える傾向にある。エチオピアの人口は 2002 年 7 月現在約 6,767 万人であるが、ある試算によれば、それが 2025 年に 2 倍、2050 年に 3 倍にまで膨

ガンジュレ語とガンタ語だけが同一言語の方言関係にあるとは思えない。

¹⁷Brenzinger (2002) には、1997 年ライブツィヒで開催された国際シンポジウム 'Symposium on Endangered Languages in Africa' がまとめられている。エチオピアについても、例えばアジスアベバ大学の Aklilu Yilma 氏によるオンゴタ語 (Ongota) の報告が言及されている。

¹⁸碑田 (2002) にも、エチオピア西南部で話されているナイルサハラ語族に属する少数言語についての興味深い報告がある。

¹⁹この点は、Kaji (2001) でも言及されている。

れあがると言われている。これは都市への人口流入が加速すると同時に、農村部においても、やはり人口が増え続けることを意味する。農村部の少数言語の使用状況が、今とそれほど変わらなければ、エチオピアの少数言語の話者数も、Kraussの予測とは逆に25年後、50年後には2倍、3倍に増えることになる。公用語などへの言語交替が、アメリカ大陸やオーストラリア大陸のように、ドラスティックに生じなければ、アフリカ(特にエチオピア)の少数言語は、今後も消滅に向かうことなく、存在し続けるのではないかと予測される。

1.5 ガンジュレ語の将来

ガンジュレ語の将来について、Siebert & Hoefft (2002:14f.) では、3人のガンジュレ語母語話者から聞いた話をもとに、ごく簡単に触れられている。それによると、ガンジュレ語が生き残るかという質問に対して、無条件ではないが肯定できるとしている。理由はシェラメラ村の大多数がガンジュレ語母語話者なので、将来少なくともシェラメラ村ではガンジュレ語が使われるからであるという。本稿では、社会言語学的なアンケート調査に基づいて、この点を検証することになる。

2 調査方法

2.1 調査年月日

2002年11月6日(水) 9時30分～13時

2.2 調査場所

首都アジスアベバから南に約500キロ離れた、ガンモゴファ州都アルバミンチから、さらにコンソへ向かう道路を南に約25キロ行った、チャモ湖の西に位置するシェラメラ村のマーケットで実施した。

2.3 調査対象者

マーケットに来ていたガンジュレ人 25 人に、調査を行った。

2.4 聞き取り方法

マーケットのそばにある家を借りて、一人ずつ面談方式で行った。あらかじめ用意していた質問項目に従って順序よく質問し²⁰、回答を得た。筆者の研究補助者として調査に同行した、ジャーナリストでもある Tamiru Shankoru 氏が、アムハラ語で正確に質問した。また、回答者の大半が公用語であるアムハラ語を十分に理解できないことを想定して、マーケットにいたガンジュレ語とアムハラ語が共に堪能な男性に、ガンジュレ語への通訳をお願いした。

3 調査結果

3.1 年齢&男女比

「年齢&男女比」は、表1のとおりである。4人の男性と21人の女性、合計25名に質問した。女性の比率が高いのは、一般にマーケットで売買するのが女性の仕事のためと思われる。年齢は12歳の女性から70歳を超えた女性まで、幅広い層から回答を得ることができた。現在のエチオピアでの平均寿命が約44歳であることを勘案すると、妥当な年齢構成と思われる。

3.2 教育レベル

回答者の「教育レベル」は、表2のとおりである。学校教育を全く受けていない割合が、全体の60%(15/25)に達し、全体的に教育レベルはあま

²⁰調査のため協力いただいた時間の謝礼として、現地の生活水準を鑑み、回答者、通訳の男性、さらに家のオーナーに対して、必要十分な謝金（あるいは回答者の希望に応じて、地方では入手困難な石鹸や塩などの実用品）を渡した。

年齢	男性	割合	女性	割合	合計	割合
12-30	3	12%	12	48%	15	60%
31-45	1	4%	4	16%	5	20%
46-60	0	0%	2	8%	2	8%
61-	0	0%	3	12%	3	12%
合計	4	16%	21	84%	25	100%

表 1: 年齢&男女比

り高くない。この傾向は、特に年配の女性で顕著である。そのため、学校での共通語であるアムハラ語²¹がほとんど理解できないばかりか、ガンジュレ語しか話さない単一言語話者が多かった。この結果は、Grimes (2000) に挙げられている単一言語話者数 186 人（全体の約 13%）という数字とかなり異なる。理由としては、単一言語話者である割合が、男性よりも女性の方が圧倒的に高いことが考えられる。

最終学歴	人数	割合
無教育	15	60%
初等学校	10	40%
高等学校	0	0%
合計	25	100%

表 2: 教育レベル

3.3 母語

表 3 に「回答者の母語」、表 4 に回答者の「両親の母語」の結果をそれぞれ示した。回答者の母語は全員ガンジュレ語であり、さらに両親の母語

²¹エチオピアの他の地域同様、現在この地域では初等教育はエチオピアの公用語であるアムハラ語で、また高等教育は英語で実施されている。

も、父親1名(コイラ語)を除いて、すべてガンジュレ語であった。この結果から、ガンジュレ人の民族としての純血度は、かなり高いことが推察される。

言語名	人数	割合
Ganjule	25	100%
合計	25	100%

表 3: 回答者の母語

言語名	父	割合	母	割合
Ganjule	24	96%	25	100%
Koyra	1	4%	0	0%
合計	25	100%	25	100%

表 4: 両親の母語

3.4 配偶者の選択および子供の第一言語

「配偶者の第一言語」および「子供の第一言語」の結果を、表5、表6にそれぞれ示した。なお表5に関しては、25名のうち既婚の22名²²が対象となり、表6では、さらにその22名のうち子供がいる19名が対象となる。

まず表5より、結婚相手には、ガンジュレ語を母語として話す、ガンジュレ人が選ばれる場合がほとんどである。ガンジュレ語は、周辺のオモ系言語の中でも、特に弱小言語である。地理的にみた場合、ガンジュレ人は、多くの他民族との共生を余儀なくされているにもかかわらず、他民族との結婚がほとんどない。理由を聞いたところ、他民族と結婚した場合、村で

²²年配の女性の中には、すでに夫と死別している人が含まれる。その場合は、過去の結婚生活での言語使用について尋ねた。

の地位が下がるそうである²³。村での儀式の時には、純粋な血を持った人間が担当するので、異民族と結婚した本人およびその子供は、将来そういう地位にはつげなくなるという。そのため、ガンジュレ人同士の結婚が好まれている。また、仮に他民族と結婚する場合であっても、結婚相手の家庭が資産家であったり、「よい職業」²⁴であることが要求される。都市部に比べて農村部では、村の中での儀式が、今も生活する上で重要な意味を持ち続けていることで、民族の純血が守られているといえる。この結果から、将来においてもガンジュレ語が存在し続けるための社会的基盤が、今なお言語共同体の中に、しっかりと根づいていることがわかった。なお、今回の回答者の中からは、Brenzinger (1999:34) に記載されているような、ガツアメ人との婚姻は全く確認できなかった。

言語名	人数	割合
Ganjule	21	95%
Oromo	1	5%
合計	22	100%

表 5: 配偶者の第一言語

一方、表 6 から明らかなように、ガンジュレ語母語話者は、子供に対しても自分たちの母語をそのまま教えている。これは次世代にガンジュレ語が生き残るための必要な条件であり、都市部に移り住んだ少数言語母語話者と対照的な結果である。例えば、ガンモゴファ州都アルバミンチに移り住んだオモ系のバスケット (Basketo) 人は、夫婦揃ってバスケット語母語話者であっても、家庭内で自分たちの母語を子供に教えないし、また互いに会話する場合でさえ母語を使わないという。移り住んだ土地で通用する言語に交替する傾向が強い²⁵。また、注目すべき点として、表 5 で唯一オロモ

²³ ザイセ語でも同じことがあるようである。Siebert & Hoelt (2002:8) 参照。

²⁴ エチオピアでは、ガビなどの衣服、ジャバナなどの粘土製の土器、ナイフや斧などの鉄器などに関わる職業は、作る人および売る人ともに、「悪魔の眼」を持つということ、あまりいい仕事ではないと信じられている。

²⁵ なお、バスケット語母語話者の言語使用の詳細に関しては、別の機会に論じるつもりである。

人と結婚したと答えた一人も、子供にはガンジュレ語を教えていることである。大言語対少数言語という単純な図式では、話し手人口1,000万を優に超えるオロモ語が、話し手人口わずか1,000人あまりのガンジュレ語より、選択されてもおかしくないが、実際には生活の場で通用するガンジュレ語の方が、子供の母語として選択されている点は、注目に値する。

言語名	人数	割合
Ganjule	19	100%
合計	19	100%

表6: 子供の第一言語

3.5 家庭内で使用する言語

この節では、回答者が「家庭内」で、どの言語を使用するかについて考察する。回答者が「家族(父、母、兄弟姉妹)と話す時に使用する言語」の結果を表7に、「両親が互いに話す時に使用する言語」の結果を表8に、「配偶者および子供と話す場合に使用する言語」の結果を表9に、それぞれ示した。なお言語名欄において「/」で区切ったのは、複数回答(二言語併用)をした場合で、前の方が無標であることを示す²⁶。また表9に関しては、表5同様、25名のうち既婚の22名、子供のいる19名がそれぞれ対象となる。

言語名	父	割合	母	割合	兄弟姉妹	割合
Ganjule	24	96%	24	96%	24	96%
Ganjule/Amharic	1	4%	1	4%	1	4%
合計	25	100%	25	100%	25	100%

表7: 家族と話す時に使用する言語

²⁶ 「/」は以降の表でも同様の意味として用いる。

言語名	人数	割合
Ganjule	24	96%
Ganjule/Amharic	1	4%
合計	25	100%

表 8: 両親が互いに話す時に使用する言語

表 7,8,9 より、「家庭内」ではいずれの場合も、ほとんどガンジュレ語のみで会話していることがわかる。この結果から、ガンジュレ語母語話者居住地域一帯には、エチオピアの公用語であるアムハラ語やオロモ語といった大言語はおろか、地域有力語であるガンモ語などが、まだ家庭レベルでほとんど浸透していないことがわかる。両親の世代、回答者の世代、子供の世代と3世代で見た場合も、全く変化がなく、常にガンジュレ語だけで会話がされている。このことから、急激な変化がない限り、将来においてもガンジュレ語は「家庭内」で使い続けられると結論づけることができる²⁷。ただし、回答者中最年少である12歳の女性のみが、家庭でもたまたまアムハラ語を話すことと答えたことから、将来家庭でも急速に二言語併用が強まる可能性も、完全には否定できない点も指摘しておく。

言語名	配偶者	割合	子供	割合
Ganjule	21	95%	19	100%
Ganjule/Amharic	1	5%	0	0%
合計	22	100%	19	100%

表 9: 配偶者および子供と話す場合に使用する言語

²⁷ 話者数でアムハラ人を凌ぐオロモ人でさえ、自分たちの母語を棄てることがある。例えば、アルシオロモの中心地であるアサツラ (Asella) では、アムハラ人がアサツラ中心部に移り住んだため、町ではアムハラ語が共通語となっている。そのためオロモ人たちがアサツラで生活するということは、アムハラ語を身につけることを意味する。知人の家庭を例に挙げると、夫婦ともオロモ人であるにも関わらず、彼らの3人の子供たちは、家庭でもアムハラ語を話し、母語であるはずのオロモ語の方は完全には身につけていない。Brenzinger が提案したような、隣接する地域有力語に順々に言語交替していくというよりも、町や村での共通語が何であるかが、言語選択にとって決定的な意味を持つと思われる。

3.6 家庭外で使用する言語

この節では、回答者が「家庭外」で、どのような言語を使用するかについて考察する。まず、「友達と話す場合に使用する言語」の結果を表10に示した。80%がガンジュレ語のみを使用し、20%がガンジュレ語とアムハラ語を使用すると答えている。アムハラ語が使用されるのは、主に学校で友達と話す場合である。初等学校において、先生が授業で教えるために用いる言語は、公用語であるアムハラ語である。つまり学校とそれ以外で言語の切り替えをおこなっていることがわかる。ただし、全体としては二言語併用は思った以上に進んでいない²⁸。

言語名	人数	割合
Ganjule	20	80%
Ganjule/Amharic	5	20%
合計	25	100%

表 10: 友達と話す場合に使用する言語

次に、村での共通語について考察する。「村で使用する言語」および「村の年長者と話す場合に使用する言語」の結果は、それぞれ表11と表12である。

言語名	人数	割合
Ganjule	24	96%
Ganjule/Amharic	1	4%
合計	25	100%

表 11: 村で使用する言語

以上の結果から、村での共通語もほぼ完全にガンジュレ語であることがわかる。とりわけ年長者と話す場合は、100%ガンジュレ語を用いている。

²⁸ 今回の回答者の60%が、学校に行っていないことが一つの要因であろう。したがって、この数字は若年層のみを対象にした場合、大きく変わる可能性がある。

言語名	人数	割合
Ganjule	25	100%
合計	25	100%

表 12: 村の年長者と話す場合に使用する言語

シェラメラ村の大半の住民がガンジュレ語母語話者で、そこで話される言語も必然的にガンジュレ語のみとなる。つまり、ガンジュレ語はシェラメラ村で生活する上で必要不可欠で、地域有力語であるガンモ語や公用語であるアムハラ語などに取って替わられるような状況にはない。今のところ、ガンジュレとしてのアイデンティティを村単位で完全に保持している。

3.7 公の場で使用する言語

この節では、「公の場」での言語について考察する。「役所で使用する言語」および「マーケットで使用する言語」の結果は、それぞれ表 13 および表 14 である。

まず役所では、ガンジュレ語だけでなく、アムハラ語を使用する人の割合(36%)が高くなっている。村のコミュニケーションではほとんど必要なかったアムハラ語が、役所では相対的に必要になる。しかし、それでも64%の人がガンジュレ語だけで済ませており、アムハラ語との二言語併用まで含めると、実に92%の人が役所でガンジュレ語を用いている。

言語名	人数	割合
Ganjule	16	64%
Ganjule/Amharic	7	28%
Amharic	2	8%
合計	25	100%

表 13: 役所で使用する言語

一方マーケットでは、ほとんどの場面でガンジュレ語だけで事足りるようである。ガンジュレ語のみが76%で、複数回答を含めると100%ガンジュレ語を使っていることになる。その他では、地域有力語であるガンモ語やアムハラ語が使用されることがあるが、あくまで補助的な役割しか果たしていないようである。つまり都市部のマーケットとは全く異なる結果である。

言語名	人数	割合
Ganjule	19	76%
Ganjule/Amharic	3	12%
Ganjule/Gamo	2	8%
Ganjule/Gamo/Amharic	1	4%
合計	25	100%

表 14: マーケットで使用する言語

4 まとめ

今回の社会言語学的な調査結果から、ガンジュレ語は、話者人口の面からすれば1,000人あまりの弱小言語であるけれども、危機に瀕した言語とはいえないと結論づけることができる。Siebert & Hoefft (2002) で言及されているとおり、ガンジュレ語は、シェラメラ村の大多数の住民が使い続ける以上、これからも何世代にわたって生き残るだろうし、また近い将来消滅することは考えられない、というのが結論である。

しかし、いくつかの条件を検討してみよう。一つは教育水準である。今回の調査では、約60%が全く学校教育を受けていなかった。これは特に高年層に顕著であり、ガンジュレ語以外の言語を話せない人が多かった。就学率が低いことが、アムハラ語との二言語併用や言語交替を阻害しているともいえる。それに対して、回答者中最年少であった12歳の女性は、家庭でもアムハラ語をたまに使うと答えていた。つまり、若年層で急速に教育

レベルが向上すると、初等教育での言語がアムハラ語である現在、アムハラ語との二言語併用や言語交替が、一気に加速する可能性も秘めている。

もう一つの条件は、アムハラ語や地域有力語を身につけることで、経済的・社会的に、よりよい仕事を得ることができるかどうかという点である。今のところ、アムハラ語や地域有力語であるガンモ語が話せることで、経済的に豊かになれるとガンジュレ人は思っていないようである。彼らの村社会の中だけで生活する上では、自分たちの母語であるガンジュレ語だけで事足りる。外に出かけていくならともかく、大半の村人は、外への意識がそれほど強くないのかもしれない。一方、わずか25キロ離れた地方都市アルバミンチでは、様相が一変する。町には2003年にインターネットカフェが登場し、都市の住民の意識は彼らの母語(ガンモ語など)から、公用語であるアムハラ語を飛び越えて、一気に英語へと向かっている。英語を身につけることがよい仕事を得る最善策であるという考えが、高校生あたりに浸透している²⁹。

エチオピアの生活レベル自体が、アムハラ語やオロモ語といったエチオピア内の大言語母語話者であろうと、ガンジュレ語のような少数言語の母語話者であろうと、それほど大差がないというのが背景にある。北米やオーストラリアの国家語が、グローバル化の象徴である英語であるのに対して、アフリカ最貧国の一つエチオピアの公用語がアムハラ語であるのでは、雲泥の差がある。たとえアムハラ語やオロモ語が堪能に話せたとしても、職を得るためのアドバンテージがそれほどない。その意味では、近い将来アムハラ語や地域有力語との二言語併用よりも、むしろ英語との二言語併用が、若年層を中心に一気に起こる可能性も否定できない。Brenzinger(2001)が指摘したような言語交替が、近隣の地域有力語との間に起こるのか、それとも一気にグローバル化が進んで、国際語英語との二言語併用に移行するのか、さらに社会言語学的検証をすることで、見極める必要があると思われる。

最後に、言語交替について言及する。言語交替とは、一般に接触した言

²⁹高校の英語教師をしているガンモ人に聞いたところ、ガンモゴファ州の高校で、「言語」の授業科目として選択できるのは、英語、アムハラ語、ガンモ語の3つである。この中で、特に英語が圧倒的に人気が高く、一方、ガンモ語(つまり母語)を選択する高校生は、ほとんどいないらしい。

語間に社会的・文化的な違いがある時、社会的に威信の高い上層語に、低い方の基層語が吸収されてしまうことである。ところで、ガンジュレ語を取り巻く環境を見た場合、このあたりの地域有力語はガンモ語である。しかしながら、ガンモ語を話すことで社会的・文化的地位が向上するかといえば、そのようなことはあまりない。むしろ、ある言語共同体に入ってきた「よそ者」自身が、自分の母語を棄てて同化すると考えた方がいい。その場合、言語間の社会的・文化的な優劣はあまり関与しない。一例を挙げると、コイラ人の男性が、ガンジュレ人の女性と結婚してシェラメラ村に移り住んだ場合、コイラ人の男性の方がコイラ語を棄てて、ガンジュレ語を話せるようになっており、母語であるコイラ語をふだん全く話していない³⁰。シェラメラ村のように、少数言語であっても純血度の高い村では、たとえ他民族が移り住んだとしても、多言語共生が発生するわけではない。それぞれの言語共同体の中に移り住むことは、自らのアイデンティティである母語を棄て、言語の大小あるいは社会的・文化的な優劣に関係なく、新しい生活地である言語へ言語交替することを意味する。ガンジュレ語に限らず、エチオピアの多くの少数言語が、今なお安定して存在し続ける大きな理由として、交通の便が悪い辺境の地であればあるほど、国家の公用語であるアムハラ語や他言語の影響を受けずに、おそらく、母語のみですべての日常生活が可能な状態が維持されているからであろう。それが、エチオピア国内の少数言語が、危機に瀕するどころか、それぞれ活力を帯びている証拠なのかもしれない。

³⁰オロモ人の女性が、ガンジュレ人の男性と結婚し、シェラメラ村に住んだ場合も同様である。

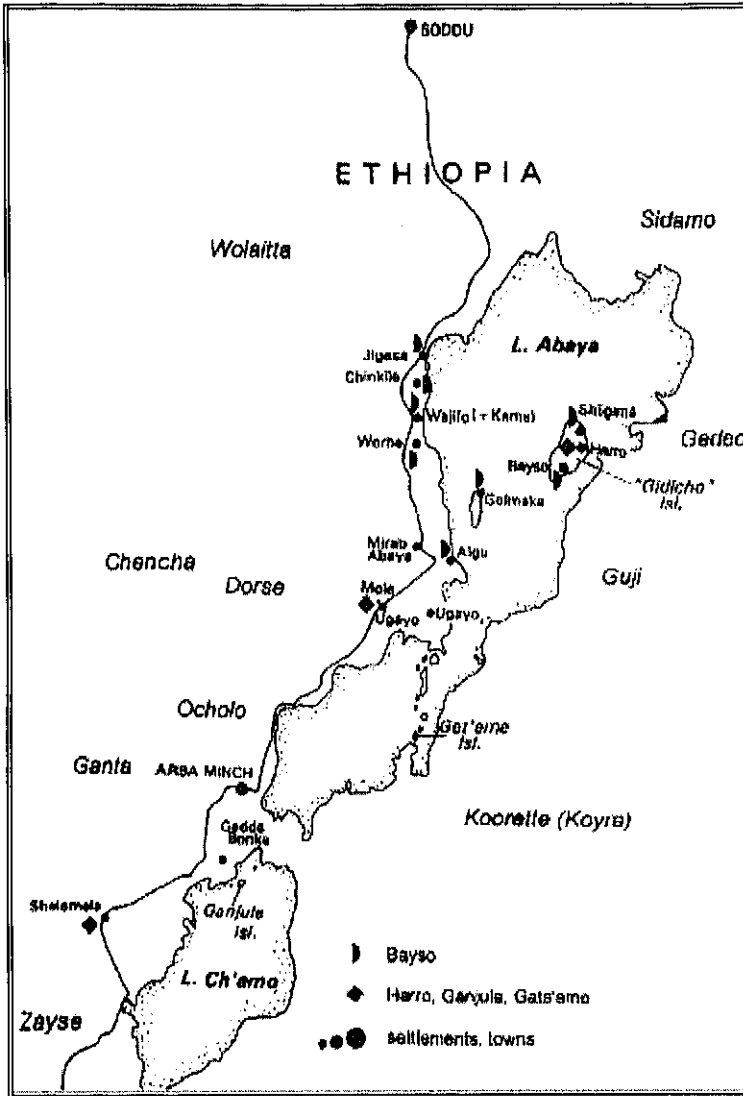


図1: アバヤ湖とチャモ湖周辺の言語地図 (Brenzinger (1999:35) より引用)

【参考文献】

- Bender, M.L. (ed.) 1976 *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*. East Lansing: African Studies Center, Michigan State University.
- Bender, M.L., J.D.Bowen, R.L.Cooper and C.A.Ferguson (eds.) 1976 *Language in Ethiopia*. London: Oxford University Press.
- Brenzinger, M. (ed.) 1992 *Language Death: Factual and Theoretical Explorations with Special Reference to East Africa*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Brenzinger, M. 1999 'The "Islanders" of Lake Abaya and Lake Chamo: Harro, Ganjule, Gats'ame and Bayso,' *SIL Electronic Survey Reports* 1999-003. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
<http://www.sil.org/silesr/1999/003/brenzin5.pdf>
- Brenzinger, M. 2001 'Language Endangerment through Marginalization and Globalization,' In: O.Sakiyama (ed.), 91-116.
- Fleming, H.C. and M.L.Bender 1976 'Cushitic and Omotic,' In: M.L.Bender, J.D.Bowen, R.L.Cooper and C.A.Ferguson (eds.), 34-53.
- Grimes, B.F. (ed.) 2000 *Ethnologue: Languages of the World. 14th edition*. Dallas: Summer Institute Linguistics.
- Hayward, R.J. 1982 'Notes on the Koyra language,' *Afrika und Übersee* 65,2, 211-268.
- Hayward, R.J. 1990 *Omotic Language Studies*. London: School of Oriental and African Studies, University of London.
- Hayward, R.J. 1990 'Notes on the Zayse Language,' In: R.J.Hayward (ed.), 210-355.
- 稗田乃 2002 「創られた『言語』、東アフリカ（ケニア、エチオピア）の場合」宮本正興、松田繁二編『現代アフリカの社会変動—ことばと文化の動態観察—』220-235. 京都：人文書院
- Kaji, S. 2001 'Comments on "Language Endangerment through Marginalization and Globalization" by Matthias Brenzinger'. *Language Endan-*

germent through Marginalization and Globalization. In: O.Sakiyama (ed.), 123-125.

Krauss, M. 1992 'The World's Languages in Crisis,' *Language* 68, 4-10.

Nettle, D. 1999 *Linguistic Diversity*. London: Oxford University Press.

D・ネトル, S・ロメイン 島村宣男訳 2001 『消えゆく言語たち—失われることば、失われる世界—』 東京：新曜社

Sakiyama, O. (ed.) 2001 *Endangered Languages of the Pacific Rim: Lectures on Endangered Languages:2 -From Kyoto Conference 2000-*. ELPR Publication Series C002, Kyoto: Nakanishi Printing CO.,Ltd.

Siebert, R. and L.Hoeft. 2002 'Sociolinguistic Survey Report of the Languages of the Abbaya/Chamo Area of Ethiopia Part I,' *SIL Electronic Survey Reports* 2002-025. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
<http://www.sil.org/silesr/2002/025/SILESR2002-025.pdf>

Sommer, G. 1994 'A Survey on Language Death in Africa,' In: M.Brenzinger (ed.), 301-417.

Language Use of the Ganjule People

Hideyuki INUI

This paper aims to clarify language use of the Ganjule people. They originally lived on a tiny island on the northwestern tip of Lake Chamo, but they left the island in 1959 because of the rising water level and lived in a place called Bonqe. Since 1974 the Ganjule people have been resettled in Shela-Mela village on the west shore of Lake Chamo, approximately 25 km south of Arba Minch, where they are said to be the majority. According to Fleming's classification (1976), Ganjule is a variety belonging to the "East Ometo" languages, which include Zayse-Zergulla, Koyra, and Kachama.

Sociolinguistic questionnaires were administered to twenty-five interviewees. The results are as follows.

- (1) Ganjule is the dominant native language throughout three generations.
- (2) Within the family Ganjule is used primarily.
- (3) Ganjule is the primary language used with friends and in the village.
- (4) In town, even when talking about administrative matters, the use of Ganjule is dominant.

For the affairs of daily life and for most administrative affairs, Ganjule is the dominant language. Concerning the language vitality, the question whether Ganjule as a language would survive or not has been answered positively but not without some reservation, since the majority of Shele-Mela village are Ganjule.

inui@yamaguchi-u.ac.jp